

川崎医科大学附属川崎病院

新病院の考え方(案)

学校法人 川崎学園

川崎医科大学附属川崎病院 新病院の考え方（案）

目 次

I. 川崎医科大学附属川崎病院	1
1. 沿革	1
2. 当院が果たしてきた役割	2
(1) 総合的な医療の提供	2
(2) 健診活動の展開	2
(3) 医療人の育成	2
(4) 地域への医療情報の発信	3
3. 現状と課題	3
(1) 病院建物の状況	3
(2) 病院建替えの検討経過	3
(3) 病院周辺環境	4
1) 岡山市中心部の病院	4
2) 岡山市と中央小学校区の人口構造及び受診者数	4
3) 岡山中央南(旧深柢)小学校跡地活用懇談会から	4
(4) 診療業務の承継	5
(5) 病院存続等の要望	5
(6) 新築移転の必要性	5
II. 新病院の考え方	6
《新病院コンセプト》	6
《新病院の概要》	6
1. 地域に密着し、信頼される病院	7
(1) 災害時対応も含め迅速で的確な救急医療	7
(2) 地域に密着した医療の提供	7
(3) 充実した高度専門医療の提供	8
(4) 質の高いリハビリテーション医療の提供	8
(5) 医療連携体制による地域完結型の医療	8
(6) 地域の健康維持を促進	9
2. 将来の良き医療人の育成	9
III. 岡山市のまちづくりへの対応について	11
(跡地活用の提言及び地域住民の方々の要望について)	
1. 医療・福祉機能(現病院の跡地活用も含む)	11
2. 災害時の対応機能	11
3. 地域コミュニティ	12
4. 中心市街地活性化への寄与	13

I. 川崎医科大学附属川崎病院

1. 沿革

川崎医科大学附属川崎病院（以下「当院」という）は、開設者 故 川崎祐宣が昭和 13 年 2 月に岡山市富田町に外科昭和医院を開業、昭和 14 年に現在地に外科川崎病院を開院して以来約 70 年にわたり岡山市中心部で医療を提供しています。

開設者の「病院は患者のためにある」という思いから「私たちは患者様を中心とし、その立場に立った思いやりと誠実な医療の提供に努め、地域社会に貢献いたします」との理念に基づき、24 時間体制で救急医療を中心に、地域に密着した診療活動を行っています。

昭和 25 年には財団法人川崎病院へと法人化し、昭和 41 年には東館、北館が完成し、総合的な医療を提供して現在に至っています。

昭和 45 年には、開設者が「多くの信頼される良医を世に送り出したい」という思いで学校法人川崎学園を設立し、川崎医科大学を開学しました。このことにより、昭和 46 年からは川崎医科大学の附属病院として臨床教育実習の受け入れを行うなど、将来の良き医療人の育成に努めてきました。

また、平成 15 年には臨床研修病院として指定を受け、医師の育成に寄与するとともに、平成 18 年には、病院機能を第三者の立場で評価する日本医療機能評価機構の認定を受けるなど、良質で安全な医療を提供しています。

昭和 13 年	岡山市富田町に外科昭和医院開業
昭和 14 年	岡山市中山下の現在地に外科川崎病院開設
昭和 25 年	財団法人川崎病院が総合病院川崎病院を開設
昭和 39 年	救急告示病院に指定
昭和 41 年	救急災害センター併設
昭和 45 年	学校法人川崎学園設置 川崎医科大学開学
昭和 46 年	総合病院川崎病院から川崎医科大学附属川崎病院へ移行
平成 15 年	臨床研修病院指定（卒後臨床研修センター併設）
平成 18 年	日本医療機能評価機構認定

2. 当院が果たしてきた役割

(1) 総合的な医療の提供

当院は、急性期医療と高度専門医療を担い地域医療に貢献してきました。診療科目は 25 科目を標榜、更にセンター機能として肝臓・消化器病センター、スポーツ整形センター等を設置し、疾患別に高度な医療を提供しています。

救急診療では、開院当初から「年中無休・昼夜診療」を理想として、診療体制を整え、昼夜を問わず救急患者を積極的に受け入れてきました。現在では救急告示病院・二次救急医療施設として地域の救急医療を担っています。

また、診療活動においては、医師を中心とした看護師、薬剤師等の多様な医療スタッフによる「チーム医療」、地域に必要とされる初期診療（プライマリ・ケア）と「全人的医療」、急性期から在宅まで切れ目のない医療「継続的医療」を推進しています。

さらに、近隣の医療機関との連携を図り患者に良質な医療が提供できるよう、地域医療連携室を設置するなど、体制を整備しています。

患者数の状況では、平成 21 年度の外来患者数（1 日平均）は 830.3 人、入院患者数（1 日平均）は 345.8 人となっています。

(2) 健診活動の展開

当院は、地域の方々の健康を守るため、いち早く健診活動に力を注いできました。

当初は院内患者の保健指導から、地区の集団検診へと範囲を広げ検診車による胃検診等を行ってきました。現在は、健康管理センターにおいて、専門医を中心に健康診断、人間ドック、健康診査等や保健指導を行い、地域の方々の健康維持・健康増進に努めています。

(3) 医療人の育成

将来の良き医療人を育成するために、臨床研修病院の認定施設として研修医を受け入れ、また臨床実習施設として看護師やコ・メディカルなどの臨床実習生も受け入れています。平成 21 年度には、川崎学園をはじめとした養成機関から 571 人の研修・実習生を受け入れています。

(4) 地域への医療情報の発信

地域の方々に有益な医療情報については、市民講座を開催するなど、定期的に情報発信しています。

また、地域の方々に対して健康や病気についての知識を普及啓発するために各種集団指導教室、講演活動などを積極的に行っています。

3. 現状と課題

(1) 病院建物の状況

現在の病院施設は、築 43 年～57 年が経過しているため、老朽化による深刻な劣化が進行し、現状のままでは近い将来、安全・安心な医療の提供が困難になる状況にあります。

これまでも診療活動を継続しながら、部分的な範囲の改修を行ってきましたが、老朽化が進行している病院基幹設備の更新を行うには、全面的に建替えの必要があります。

また、現在の施設は 40 年以上前の面積水準であるため施設が狭く、最新の大型医療機器や検査機器等の導入ができていない状況にあります。

そして施設の老朽化、狭隘化により、患者のプライバシーやアメニティなど療養環境面についても、十分に提供ができていません。さらに、建物は昭和 56 年の新耐震基準以前に建設されているため、現在の耐震基準を満たしていない状況です。

(2) 病院建替えの検討経過

病院の建替えについては、平成 11 年から検討を始めました。

現在の建物は、敷地いっぱいに建設されているため、現地で病院を建替えるためには、病院を長期間にわたり閉鎖することになり、患者に多大なる迷惑をかけるので現地建替えはできません。

また、一部を解体して段階的に建替えを行うことは、手術室、検査室、機械室などの診療を継続するうえで止めることが出来ない機能が 4 棟に分散しているため、診療を継続しながらの建替えは困難であり、また患者に多大なる迷惑をかけることになるため、段階的な建替えは現実的ではありません。

さらに、現地周辺の民地を買上げまたは借用しての建替えも検討しましたが、諸事情から不可能との結論に達しました。

こうしたことから、現地での建替えは断念し、岡山市中心部での新築移

転を模索しましたが、不調に終わっています。

(3) 病院周辺環境

1) 岡山市中心部の病院

岡山中央小学校区内には、当院の他に岡山赤十字病院、国立岡山病院（岡山医療センター）がありました。しかし、岡山赤十字病院は昭和60年に岡山市南区青江に移転、国立岡山病院は平成13年に岡山市北区田益に移転しました。

また、近隣地区の岡山市立市民病院の移転が岡山市北区北長瀬表町に決まり、岡山市中心部での医療の空洞化が懸念されます。

2) 岡山市と中央小学校区の人口構造及び受診者数

近年、岡山市と中央小学校区の人口は微増傾向になっています。

このうち、岡山市における平成21年度の65歳以上の高齢者の割合は21.1%と年々高齢化が進み、中央小学校区においても25.5%となり、岡山市全体より高い水準になっています。

また、当院における平成21年度の岡山市受診者数は27,758人であり、そのうち中央小学校区の受診者数は3,115人です。中央小学校区人口は17,939人で受診者率は17.4%となっており、6人に1人の割合で当院を利用しています。

今後、岡山市中心部での人口増加と高齢化の進行により、医療ニーズが高まることが予想され、安全・安心な生活を送る上で総合的な医療機関があることが望まれます。

※受診者率 = (中央小学校区受診者数 ÷ 中央小学校区人口) × 100

(人口：『岡山市の統計-平成21年版』「7.年齢5歳階級、学区別住民基本台帳人口」より)

3) 岡山中央南（旧深砥）小学校跡地活用懇談会から

平成17年の岡山中央南（旧深砥）小学校の閉校に際し、跡地活用についての懇談会が開かれ、岡山市に対して提言がなされました。提言では「健康な暮らしを支える」ために「地域に貢献できる総合病院を残すことが必要であり、それも単なる病院としてではなく、まちづくりの視点から、市民が安心して生活を送れる拠点としての機能が望まれる」とあり、健康な暮らしを支える拠点として岡山市中心部における医療施設の必要性が挙げられています。

また、「災害等に備える」として、災害時に避難できる場所の確保や緊急医療の対応についても提言されています。

(4) 診療業務の承継

現在病院を運営している財団法人川崎医学振興財団は平成 23 年 3 月末までに解散し、当財団が母体となって設立した学校法人川崎学園が診療業務を承継します。これにより川崎学園と一体になり、この地に総力を集結して地域医療の更なる充実を図ります。

(5) 病院存続等の要望

深柢地区の 1,500 人の方々を含む市民の皆さま 10,000 人を超える方々から、「川崎病院が引続き岡山市中心部で安全・安心な医療の提供を継続していくとともに、新病院建設計画を具体的に進めるように」との要望が寄せられています。

(6) 新築移転の必要性

現在の病院は、施設・設備の老朽化・狭隘化により、近い将来病院としての機能が果たせなくなる状況にあります。また、地域の医療ニーズに対応し、継続的に良質な医療を提供していくためにも、岡山市中心部に病院を新築移転する必要があります。

新築移転する病院は、現病院の有する病床数を踏まえた規模を考慮しており、岡山市中心部での移転先としては、小学校統合後もそのままとなっている岡山中央南（旧深柢）小学校跡地以外には見当たりません。

以上のことから、この地を利用させていただきたいと考えています。

Ⅱ. 新病院の考え方

現在の病院理念を継承し「地域住民に信頼され安全・安心を提供できる病院」を基本方針として、地域の医療ニーズを踏まえ、救急・高度専門医療を中心とした質の高い医療を提供するとともに、将来の良き医療人を育成して医療と教育の分野で地域に貢献します。

《新病院コンセプト》

川崎医科大学の附属病院として安全・安心な医療を提供し、
地域と共生する病院



1. 地域に密着し、信
頼される病院



2. 将来の良き医療
人の育成

《新病院の概要》

『地域の医療ニーズを踏まえ、医療を必要とする
だれもが安心して受診できる病院を目指します』

- 災害時対応も含め迅速で的確な救急医療
- 地域に密着した医療の提供
- 充実した高度専門医療
- 質の高いリハビリテーション医療
- 医療連携体制による地域完結型の医療
- 地域の健康維持を促進
- 将来の良き医療人の育成

1. 地域に密着し、信頼される病院

(1) 災害時対応も含め迅速で的確な救急医療

- ・「年中無休・昼夜診療」で救急科専門医による迅速で的確な救急医療を提供します。

新病院は、救急センターに救急科専門医を常駐させ、「年中無休・昼夜診療」で救急患者を受け入れる体制とします。

そして救急患者の中でも、脳卒中や心筋梗塞などの脳・心疾患や、小児に多い感染症、また交通事故による外傷疾患等は、各科との連携を取りながら適切な救急診療を行います。

※川崎医科大学では、日本で初めて救急医学講座と脳卒中医学講座を立ち上げて、さらに高度救命救急センターを開設し、高度医療を提供しています。

- ・災害時にいち早く医療が提供できる安全・安心な施設を目指します。

新病院は免震構造を採用し、災害時にはいち早く救急センターに被災者を収容し、迅速に災害時の初期医療を提供します。また大規模災害時には、病院内の待合、リハビリテーション室等の広い空間に医療ガスの配管等を整備して、緊急時の受け入れを可能とします。また、災害時でも病院機能が維持できるように自家発電設備、受水槽等の設置や、医薬品、医療材料、食料等を備蓄し、早急に対応いたします。

(2) 地域に密着した医療の提供

- ・地域に密着した病院として、プライマリ・ケアと全人的医療を提供します。

新病院においては、総合診療科※を設け、従来から行ってきた地域と密着した医療を継続して行います。全身倦怠感、体重減少、発熱など診療科の特定ができないあらゆる患者の初期診療（プライマリ・ケア）と全人的医療を行い、必要に応じて専門科に紹介します。

※川崎医科大学附属病院では全国に先駆けて総合診療科を立ち上げ、一般内科医として経験豊富な医師や、幅広い知識を持った医師が、プライマリ・ケアと全人的医療を実践しています。

- ・小児医療の充実と高齢化社会へ対応した医療を提供します。

不足している小児医療の充実を図り、小児に多い感染症、アレルギーなど専門的な疾患まで小児医療を展開します。

また、高齢者に多い循環器系の疾患に対する医療の充実と、骨粗しょう

う症、関節疾患、認知症疾患の治療など高齢化社会に求められる医療を提供します。

(3) 充実した高度専門医療の提供

- ・高度専門医療の充実を図り、質の高い医療を提供します。

川崎医科大学の教授、准教授等が最新の検査、治療機器により専門性の高い診療を行うとともに、医師を中心としたチーム医療を展開し、質の高い医療を提供します。

なかでも悪性新生物（がん）、心疾患、脳血管疾患や生活習慣病など患者の増加が懸念される疾患の治療に重点的に取り組みます。

特に「がん」については、最新画像診断機器（CT・MRI等）の導入により早期発見し、治療においてはEBM（Evidence Based Medicine：根拠に基づいた医療）に基づいた治療方針により手術や最新の機器による放射線治療、化学療法などを行います。また、通院による化学療法（通院治療センター）等により生活スタイルにあった治療方法の選択や、緩和ケアチームによる癌性疼痛の緩和や不安解消など安心できる患者支援を行い、QOL（Quality of Life：生活の質）の向上に努めます。

(4) 質の高いリハビリテーション医療の提供

- ・早期社会復帰、在宅に向けた高度なリハビリテーションを提供します。

近年、早期に患者の社会復帰を図ることからリハビリテーションが重視されています。リハビリテーションを必要とする脳卒中や整形外科手術後などの患者にベッドサイドでの早期リハビリテーションや早期離床・早期退院に向けたリハビリテーションを行います。そして、重点的にリハビリテーションを行う回復期リハビリテーション病棟を設置し、医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士等がチームとなって、リハビリテーション医療を提供します。

(5) 医療連携体制による地域完結型の医療

- ・地域医療機関や福祉施設と連携を強化し、地域完結型医療を目指します。

患者に最適な医療を提供するためには、患者が急性期から回復期を経て、在宅医療へと切れ目のない継続的医療や必要な介護サービスを確保する体制が必要です。患者支援センターにおいて、患者の疾患に

あわせて療養のサポートをすると共に、医療機関等の相互の連携ができる体制の強化を図ります。さらに、疾患ごとの地域連携クリニカルパスの普及に努め、地域医療ネットワークを推進します。

また地域医療を支援する体制として、かかりつけ医の支援や設備の共同利用、各医療機関等との勉強会や情報交換を通じて治療技術や知識の共有化を図るよう努めます。

(6) 地域の健康維持を促進

- ・人間ドック等の健康管理に取り組み、地域住民の疾患予防に貢献します。

人間ドック等の健診活動を通じて地域の方々の健康増進に努めます。

健診により病気になるリスクが高い方が病気にならないように、また病気となる予兆についてのチェックを行うこと等により、病気に対する予防や、病気が深刻な状況になる前に早期に発見し、早期治療に結び付けます。また、医師、保健師、管理栄養士、健康運動指導士による適切な指導、生活指導、保健指導により、健康維持、増進と生活習慣病予防に努めます。

これらの健診活動には最新画像診断機器（CT・MRI等）を導入し、「がん検診」など個人のニーズに応じて多様な健診が受けられるよう充実を目指します。

- ・医療、福祉の情報を提供します。

健康教室、市民公開講座などを開催し、地域の方々に医療、福祉に関する最新の医療情報を発信していきます。

2. 将来の良き医療人の育成

学校法人川崎学園が開設している川崎医科大学、川崎医療短期大学、川崎医療福祉大学、学校法人九曜学園が開設している川崎リハビリテーション学院、学校法人旭川荘が開設している旭川荘厚生専門学院には、現在約6,400人が在学しています。

これまでに川崎医科大学で、約3,500人の医師を養成し輩出してきました。また看護師は川崎医療短期大学、川崎医療福祉大学等で約9,700人を養成し、岡山県下でも屈指の看護師養成機関です。そして臨床工学技士、診療放射線技師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士等のコ・メディカルについては、川崎医療短期大学、川崎医療福祉大学、川崎リハビリテー

ション学院の合計で約 9,000 人の医療人を養成し、医療・福祉に貢献しています。

今後は川崎医科大学附属の教育病院として、医師や看護師、コ・メディカル、救急救命士など医療関係職種の研究・実習を幅広く受け入れるなど、将来の良き医療人の育成に取り組めます。

Ⅲ. 岡山市のまちづくりへの対応について

(跡地活用の提言及び地域住民の方々の要望について)

1. 医療・福祉機能（現病院の跡地活用も含む）

新病院では、「地域住民に信頼され安全・安心を提供できる病院」を基本方針として、地域の医療ニーズを踏まえ、救急・高度専門医療を中心とした質の高い医療を提供するとともに、将来の良き医療人を育成して医療と教育の分野で地域に貢献します。

このため、

- ① 災害時対応も含め迅速で的確な救急医療
- ② 地域に密着した医療の提供
- ③ 充実した高度専門医療
- ④ 質の高いリハビリテーション医療
- ⑤ 医療連携体制による地域完結型の医療
- ⑥ 地域の健康維持を促進
- ⑦ 将来の良き医療人の育成

の目標を掲げます。そして地域の医療ニーズを踏まえ、医療を必要とする誰もが安心して受診できる病院を目指し、「年中無休・昼夜診療」で救急患者を積極的に受け入れる等、地域の方々がいつでも病院にかかれる体制づくりに努め、地域の安全・安心な生活に貢献し「地域と共生する病院」として医療を提供していきます。

また、患者に最適な医療を提供するために、患者が急性期から回復期を経て、在宅医療へと切れ目のない継続医療や必要な介護サービスを確保する体制を整え、患者の疾患にあわせて療養のサポートをすると共に、医療機関等の相互の連携ができる体制を強化します。

そして現病院の跡地については、高齢化社会に対応できるよう、医療、福祉、教育の機能を考えます。

2. 災害時の対応機能

・施設内

大規模災害により負傷者が発生した場合、災害医療の迅速な対応はもとより、家屋が倒壊した被災者については、リハビリテーション室や、病院に併設する形で設置を予定している多目的ホール等の広い空間で、一時的な避難場所としての利用が可能と考えています。

- ・災害医療

新病院は免震構造を採用する考えのため、大地震で近隣の建物が倒壊しても十分に耐えられる構造を想定しています。したがって災害が発生した直後から迅速に初期医療を提供します。

また、診察室以外でも病院内の待合等にも医療ガスの配管等を整備し、いち早く負傷者を収容し治療を行います。

- ・備蓄

緊急時における生命や生活の維持のためにも、食料・水の確保は必要であり、災害時での医療を提供していくためには、医薬品、医療材料等、また、電気、水等のライフラインの確保は最低限必要です。

このため、災害時下での医療の提供を想定して、医薬品、医療材料、食料等を3日分程度は備蓄し、災害時でも医療を提供し、地域の方の安全・安心に貢献します。

また、自家発電設備、受水槽等を設置することにより、緊急時でも病院機能が維持出来るよう対応を考えています。

- ・グラウンドを含む屋外

旧深柢小学校跡地のグラウンド相当部分は、災害時には避難場所、また通常時は、市民や地域の人々が集まり交流できる場所としていきたいと考えています。

3. 地域コミュニティ

- ・地域の住民にも利用していただける集会機能

病院に併設して地域の皆さまのコミュニティ活動に利用できる多目的ホールの設置を考えており、この施設は定期的に健康教室、公開講座等を開催し、医療、健康に関する情報発信の拠点として活用するとともに、要望があれば地域の人々が交流の目的で利用していただける集会機能を持った施設にしたいと考えています。

- ・グラウンド部分

グラウンド部分は、災害時の避難場所としてだけでなく、地域の皆さまをはじめとして、広く市民の方々に開かれた都市型公園として、人々が集まり交流できる場所とするとともに、健康増進活動、リハビリ訓練等ができる場所として活用していきたいと考えています。

4. 中心市街地活性化への寄与

- 1日の外来患者、スタッフ等による商店街、地域への波及効果
新病院では、外来患者、入院患者、患者さんの付き添いや見舞い客等で1日あたり約2,700人の来院を見込んでおります。また、この他にも業者、実習学生、職員等約1,300人、合計約4,000人の病院への出入りを予想しています。
これらの方が地元商店街等を利用することにより、賑わい創出や経済的な波及効果が期待できます。
- 教育機能による若者の交流効果
川崎医科大学附属の教育病院として、医師や看護師、コ・メディカル、救急救命士など医療関係職種の研修・実習の受け入れを行うため、多くの若者が集まることでまちが賑わい、市内中心部の活性化が期待できます。
- 医療福祉機能による定住化促進への寄与
新病院では、市民が安心して暮らすことができるよう、病院と地域の医療福祉施設との連携や、中心市街地での医療-福祉機能の充実を図ることにより、中心市街地での定住化促進に寄与したいと考えています。
- 安心の砦
新病院では、「年中無休・昼夜診療」を理想として昼夜を問わず、救急患者を積極的に受け入れ、地域に密着した病院として安全・安心な医療を提供いたします。
また災害時には、いち早く被災者を収容し、初期医療を提供するなど、市民の皆さまにとりまして、安心の砦となる病院づくりをしていきます。